

第5回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

# 「惑星観覧車」

栃木県 県立氏家高等学校 三年 大野真季



賢治のまちから  
高校生★童話大賞

銀の星賞

栃木県 県立氏家高等学校 三年 大野 真季

『惑星観覧車』

あきちゃんには、お父さんがいません。

「ねえ、あきちゃん見て見て。このキーホルダー、とってもかわいいでしょ。私の宝物にするんだ。」

「わあ。どうしたの、それ。」

どうしてお父さんがいないのかも、あきちゃんにはわかりません。他の子にはお父さんがいるのだと気づくずっと前から、あきちゃんの家族にお父さんはいませんでした。

「昨日ね、デパートでお父さんが買ってくれたの。冬休みになったら、また連れて言ってもらって約束したんだ。」

「あのね、私もなのっ」

だから、本当は何も知らないはずなのです。だって、いない人のことなのですから。

ところが、あきちゃんの心の中には、たった一つだけお父さんの繋がりが転がっていたのです。まるで道端の小石のように、ころんと一つ、気まぐれに。

淡い記憶でしかないそれは、けれども時折、きらきらと星のように輝いて、あきちゃんにもお父さんがいるんだよと、自身をくれるのでした。

「私もね、約束したんだ。お父さんと約束したの。観覧車に乗せてもらって、お父さんと約束したのっ。」

「えっー、嘘だあ。」

「嘘じゃないもん。」

けれど、そのことを話しても誰も信じてくれませ。

「じゃあ、いつそんな約束したの。」

「それは……分らないけど。」

「ほら、やっぱり。」

「だって、私知ってるもん。あきちゃんにはずっと前からお父さんがいないって、うちのお母さんが言ってたもん。あきちゃんの嘘つき。」

「嘘じゃないもん。」

「嘘つきは泥棒のはじまりだよ。あきちゃん、いけないんだ。」

あきちゃんは喉の奥の熱い息を感じながら、きゅつと唇を噛みしめました。

じわんじわんと盛り上がってきた涙が、あきちゃんの視界を水の中のようにぼやかせせます。信じてもらえないというのば、どうしていつも、こんなに悲しいのでしょうか。まるで、あきちゃんとお父さんは繋がってなんかいないんだよと、そんな風に言われているような気がしてしまふのです。あきちゃんは、泣いてしまふそうになるのを必死で堪えて、消え入りそうな声で呟きました。

「嘘じゃ、ないもん……。」

あきちゃんの涙に濡れた小さな目を、冬のおいに満ちた北風が、すうつと冷やしていきました。

「お母さん。今日ね、あきちゃん嘘つきって言われた。」

ジャージャーとうるさく水を吐き出していた水道が、きゅつという音で止まりました。お母さんは皿洗いをしていた手をエプロンで拭きながら、冷蔵庫に寄りかかっていたあきちゃんの顔を覗き込みました。

「あらあら、どうして。」

夜の冷たい空気で、台所は嫌というほどに冷えています。けれど、お母さんの優しい細い目が、お月様のようにしんと暖かかったので、あきちゃ

んはほくほくとした気持ちでお父さんとの約束のことを話しました。

「……………それでね、その約束のことを話したんだけど、信じてもらえなかったの。」

「そう……………」

そこまで話を聞いたお母さんは、小さな溜め息をつきました。その小さな溜め息は、次の瞬間にはお母さんの笑顔の後ろに隠れてしまいました。あきちゃんの心に深く残りました。

「ねえ、あきちゃん。お父さんがいなくて寂しいのは分かるの。でもね、あきちゃんにはお母さんがいるでしょう。」

急に、じんじんとした足先の冷たさがはっきりかんじられました。頭の中に、お母さんの溜め息がこびりついているような気がします。

「だから、もうそんな嘘については駄目よ。」

「嘘じゃないよ。嘘ついてないよ。」

ぎゅっと蛇口をひねって、お母さんは再びお皿を洗い始めました。

「……………あきちゃん、もう寝る時間ですよ。」

やっぱりと思いました。がっかりしました。あきちゃんはじっとお母さんの背中を見つめていましたが、聞こえてくるのは食器のぶつかり合う音と、泡立つ水の音だけでした。

とぼとぼと居間へ戻ったあきちゃんは、カーテンをくぐって、窓の真ん中に立って落書きを始めました。結露でぼうっと白くなった窓ガラスの向こうには、冷え切った夜が広がっています。その上を滑るように、あきちゃんの指が思いつくままに絵を描いていきます。

線路を走る汽車ぼっぼ、かわいいドレスのお姫様、にっこり笑ったうさぎさん。

暗い景色に浮かび上がって見えるあきちゃんの落書きたちは、まるで泣いているように、静かに雫を流しました。

チューリップの花畑、煙突屋根の小さなお家、羽をパタパタ小鳥さん。

描いたそばから、つうつうと雫の縦線が落書きの上を通っていきます。あきちゃんはふと手を止めて、窓ガラスの上の方を眺めました。あきちゃんはまだ背か低いので、手の届かない上の方は真っ白なままです。その瞬間、お友達の日つきやお母さんの溜め息が、つうつうと心の上を通っていきましました。あきちゃんは何んとも寂しい気持ちになって、拙い平仮名で書きました。窓ガラスの冷たさで赤くなった指先を、ゆっくりと動かします。

おとおさん。

不思議でした。書き終わった瞬間、顔もわからないお父さんに、会いたくてたまらなくなりました。心の中いっぱい、寂しさと、たった一つの約束が溢れ返ります。鼻の奥がつんとして、とても泣きたくなりました。あきちゃんはすすつと鼻をすすつて、もう一度窓の上の方を見上げました。

「……………あれ。」

あきちゃんはいしばらくぼかんとした姿、目を真ん丸くしました。胸が太鼓のように、どきどき騒ぎ出します。先程見たとき、そこは確かに真っ白なままでとた。ところが今は、あきちゃんには背伸びをしても届かない高いところに、文字が書いているのです。大きく、短く。ほんの少し涙の浮かんだ瞳が、そこに釘付けになりました。

「この字……………あきちゃんにも読める。えっと、ええっと……………」  
少しでも文字に近づこうと、あきちゃんは思い切り飛び跳ねました。

「あ、き……………あき。あきって書いてあるっ。」  
あき。

そこには、そう書かれていました。あきちゃんはきらきらと目を輝かせて、まじまじとその字を眺めます。その字はお母さんや先生のととは違って、丸くなく、右上がりの癖がありました。

「あきちゃん、明日起きられなくなるわよ。早く寝なさい。」

お母さんの声が台所から聞こえてきます。あきちゃんはぎりぎりまで文字を見てしようと、黙って突っ立っていました。「あき」と書かれたその向こうに、点々と白い輝きが見えます。きつと、満点の夜空に散らばる星粒のいくつかに違いないと、あきちゃんは思いました。

「あきちゃんっ、いつまで起きているのっ。」

お母さんの怒鳴る声に、あきちゃんは慌てて布団へ潜り込みました。窓ガラスの「あき」の字がなんだかとても嬉しくて、布団の中で目を瞑っても、目の裏には文字と、その向こうの小さな星粒が、眠ってしまうまでしっかり映っていました。

次の日も、その次の日も、寝る前に必ず、あきちゃんは窓際へ行って「おとおさん」と書きました。次の日も、その次の日も、窓には必ず、「あき」と書いてありました。あきちゃんはそれを見る度に、飛び上がるほど喜びました。

ある日の夜、あきちゃんはこの不思議な文字のことを、お母さんに教えてあげることになりました。

「ねえ、お母さん。あきちゃんが今から、すうごいこと教えてあげるっ。」

「すうごいことを教えてくれるの。」

「うん、耳貸して。」

屈んだお母さんの耳元に、あきちゃんは顔を寄せました。内緒話をするように、密やかな声で話し出します。窓に書かれた「あき」の文字、右上がりの癖、その向こうの星粒、きつとお父さんが書いたにちがいないのです……。

あきちゃんはこの話をしたら、てっきりお母さんは喜んでくれるものかと思っていました。だって、あきちゃんのお父さんのことなのですから。ところが、お母さんはまた小さな溜め息をついて、言い聞かせるように言い

ました。

「あきちゃん。前にも言ったでしょう、嘘はいけないのに字が書かれる訳はないし、ましてそれがお父さんが書いたものだなんて。．．．あきちゃん、お父さんがいなくてもあきちゃんが寂しくないようにお母さん頑張るから。だからそんな嘘はもう、ついては駄目よ。」

「違うよ、あきちゃん寂しいんじゃない。お父さんはいるんだもん。」

「あきちゃん。」

「だって、本当にお父さんと約束したんだもん。お母さんが知らないだけで。」

「あきちゃんっ。どうしてそんな嘘をつくの。お母さんと二人だけじゃ、お父さんがいなくちゃ、あきちゃんは幸せじゃないのっ」

あきちゃんは決して、そんなつもりで言ったものではありませんでした。けれど、お母さんは立て続けに言いました。

「お父さんはもういないのよっ。」

ショックでした。膨らんでいた気持ちが一気に破裂して消えていきます。お母さんが、意地悪な魔女のように見えます。あきちゃんは、ぐっと口を結んで、今の窓際へと走っていきました。

あきちゃんは滑り込むようにカーテンをくぐって、目の前の真っ白な窓に、

「おとおさん」と指を滑らしました。窓ガラスはとても冷たくて、書いているうちに我慢していた涙が溢れてきます。

「お父さん．．．．．観覧車、乗りたいよう。約束、やくそく．．．．．」あきちゃんはしゃくりあげながら、窓の高いところを見上げました。けれど、真っ白な窓には何も書いてありません。まるで、最初から何も起こる訳がなかったかのように、しんと白いままで。あきちゃんは悲しくてたまらなくなりました。顔をぐしゃぐしゃにして、声を上げて泣きました。

それからすぐのことでした。ふと気づくと、あきちゃんの左手を温かい

何かが包んでいました。けれど、そちらを見ても何もありません。あきちゃんは首をかしげながら、今度は窓の方を見ました。

「あれ。」

すると、どうでしょう。結露で白くなった窓に、あきちゃんの姿がおぼろげに映っています。その隣に、ぼんやりと人影が映っているのです。あきちゃんは驚いて、急いで窓ガラスの結露を手のひらで拭きました。水滴がいくつも床に向かって流れていきます。透明を広げていく窓ガラスに、鮮明な、あきちゃんと誰かの姿が映し出されます。手のひらが冷たさで赤くなってきた頃、にこにここと笑った男の人が、しゃがんで、あきちゃんと手を繋いでいるのが分かりました。あきちゃんは信じられず、何度も目を擦ります。顔はよく見えませんが、とても優しそうな笑顔です。男の人は、窓ガラスを見つめるあきちゃんに向かって、ひらひらと手を振りました。あきちゃんはぎよつとして、一歩後退ります。

「お、おばけっ。」

男の人はがっくりと肩を落とした後、立ち上がって、窓の上の方に手を伸ばしました。あきちゃんの手が届かなかった上の方は真っ白なままで、男の人が何をしているか全く分かりません。

あき。

窓のその字が浮かんた後、男の人は再びしゃがんで言いました。その声は、まるで窓の外から喋っているようにくぐもっていて、風が吹いたら流されてしまいそうなほど小さなものでしたが、低くて温かな音声は、あきちゃんの耳にしつかりと届きました。

「地球はね、観覧車なんだよ。」

あきちゃんは、じっと窓ガラスの中の男の人を見つめました。

「お父さんなの。」

男の人は、ただ黙って微笑みます。





「お父さん。観覧車、乗せて。一緒に乗ろう。」

あきちゃんは泣きそうになりながら言いました。けれど、男の人は悲しそうに首を横に振りました。

「お父さんはもう、ずっと前に観覧車から降りてしまったんだよ。」

そして、次の車間には、窓ガラスに映っているのはあきちゃん一人になっていたのです。

あきちゃんは何度もお父さん呼びましたが、お父さんの返事は二度とありませんでした。

あきちゃんはしばらくぼうっと突っ立っていましたでしたが、だっと駆け出しました。台所へと駆け込んで、お皿を洗っているお母さんに向かって、あらん限りの声で怒鳴ります。

「地球はねっ、観覧車なんだよっ。」

食器を洗っていたお母さんの手が、ぴたりと止まりました。もう一度怒鳴ります。

「地球はねっ、観覧車なんだよっ。お母さんっ。」

お母さんが手に泡をつけたまま、驚いた顔で振り向きました。

「それ……お父さんが言ってた言葉だわ。」

あきちゃんはこくと頷きました。お母さんは呆然とした様子で、あきちゃんは毅然とした様子で、お互いに見つめ合います。お母さんの手から、水がぽたぽたと滴り落ちました。

「お父さんがね、お母さんと遊園地に行った時に言っていたのよ。お父さんって、高所恐怖症の人でね、観覧車に乗れなかったの。観覧車に乗れないなんてつまらないって、お母さんが言ったら、お父さんは言ったのよ。惑

星は、太陽の周りをぐるぐると回っているんだ。火星も、木星も、冥王星も、みんな、もちろん地球も。だから地球はね、観覧車なんだよ。太陽を中心に回る観覧車。ぼくたちはもう、観覧車に乗っているじゃないか。」ってね。

屁理屈やさんよね、全く。」

「あきちゃんも、お父さんから聞いたの。」

「うん、信じる。」

そう言いながら、お母さんの瞳は遠い過去を見ているようでした。

あきちゃんは、お母さんの濡れた手を掴んで、居間の窓際まで引っ張って行きました。窓を見て、お母さんは立ち尽くします。呟くように言いました。

「ねえ、あきちゃん。お父さんと約束をしたって言ってたでしょう。今度のお休みの日、観覧車に乗りに行こうか。」

窓ガラスには、雫の縦線でよく分からなくなってしまった「あき」の文字が残っていました。あきちゃんはそれを見つめながら、お母さんの冷たい手のひらをぎゅっと握ります。足元も指先もとても冷えていましたが、あきちゅんはちっとも気になりませんでした。

「うんっ。」

「きつと、お父さんの約束はこういうことだったのね。お父さんが、あきちゃんが観覧車に乗れるように導いてくれたんだわ。」

あきちゃんは違うような気がしましたが、何も言いませんでした。

きつと、お父さんはもう約束を果たしていたのだと、あきちゃんは思います。

お父さんとお母さんが、この地球にあきちゃんを生んでくれたときに。この家の家族にしてくれたときに。あきちゃんに名前を付けてくれたときに。だって、この家の窓の「あき」の文字の向こうに見える景色は、世界中のどんな観覧車から見る景色よりも、最高に美しいに違いないのですから。